

南青協便り 第 215 号



南米産業開発青年隊協会会報 2022 年 06 月 12 日発行
Boletim n.215 Seinentai do Brasil : Edição 12 de junho de 2022

4 月 11 日 サン ミゲル アルカンジヨ文協会館の庭に現れた王国カナリア
CANÁRIO REINO no pátio de Kaikan SMA em 11-04-2022



5 月 2 1 日の月例会に 5 人が集まりました。Reunião Mensal



一、Fotos da Capa 表紙写真：

Acima : Um Canário Reino apareceu a 2 metros da janela do carro que parei no pátio de Kaikan de S.Mig.Arcanjo em 11-04-2022 que ver pela primeira vez.

Abaixo : Reunião mensal realizado em 21 de maio e compareceram 5 Membros = Srs. Watanabe, Koyama, Bonkohara, Soga e Osada.

上 : 4 月 11 日サン・ミゲル・アルカンジョ文協会館の前庭に現れた王国カナリア。駐車した車の窓から 2 メートルのところに現れました。

初めて見た野生化したと思われる綺麗なカナリアです。

下 : 5 月 21 日の月例会には 5 人が集まりました。

左から渡辺進、小山徳、盆子原国彦、曾我義成、長田譽歳各氏 1

一、Índice 目次 2

一、「南米産業開発青年隊 65 周年記念大会中止」のお知らせ

会長 渡辺 進 . . . 3

一、4 月の例会報告。5 月の例会報告

会長 渡辺 進 . . . 4~5

一、【お知らせ】下記の方々のメールアドレス・電話番号・住所です . . 6

一、王国カナリアのもう 1 枚の写真です。

パイネイラ(Paineira トックリキワタ)の花が満開でした。 7

一、【会計報告】3 月分、4 月分 サンパウロ 8 期 長田譽歳 . . . 8~9

一、自分史 (34) ポルトガル 10 期 岡井よししげ . . 10~16

一、ウクライナの反転攻勢はあるのか サンパウロ 9 期 貝田定夫 17~20

一、秋深し フォス・ド・イグアスー 単独 齋藤信夫 . . 21~22

一、パラナ州ガイーラのセッチケーダスの滝 グーグル提供写真 23

一、私たちの 40 年 [幻の滝セッチ・ケーダス] 和田好司 . . . 24~26

一、福岡先輩来宮そして、松永先輩との再会

産業開発青年隊同窓会長 鈴木浩明 . . . 27~28

一、日本での 10 期生の写真

鈴木浩明 OB 会長から . . . 29~30

一、不整脈

サンパウロ 8 期 長田譽歳 . . . 31~36

一、インディオと秘境生活=山木源吉さん

ニッケイ新聞 . . . 37~46

一、森淳介ご夫妻と再会しました

S. Mig. Arc. 8 期 志方進 . . . 47~51

一、【編集委員】【名簿訂正】【お願い、お知らせ】【編集後記】 . . . 52

【備考】「インディオと秘境生活」では地図に地名を加筆し、保護区に移り住んだタピラペ族の人数を 8 期山木源吉さんに聞いて校正しました。

「南米産業開発青年隊65周年記念大会中止」のお知らせ

会長 渡辺進

南青協会員ならびに御家族の皆様お元気でお過ごしのことと思います。このたびは皆様にさびしいご報告ですが、4月の月例会で65周年記念大会の中止が決まりました。

ワクチンで重症化リスクはかなり防げておりますが、いまだ収束といえません。さらに飛行機、バスなど移動手段もスムーズとはなっていない状態です。そんなわけで、会員、役員の皆さんで話し合い決定しました。

ブラジル青年隊にとって5年に一度の大イベントですので、中止するようないことが万が一にもあってはならないと役員、会員とも全員が思っていました。

もうすぐ開催できるという思いで結論を先に延ばしてきましたが、前述したように、コロナの現状、混沌としている交通事情、さらに3年後に70周年がみえてきています。それらを考えると中止もやむを得ないのではないかとの意見も出てきました。

そのような経緯で今回の会議で中止という結論に達した次第です。

なお、日本の青年隊同窓会会長鈴木浩明さん、光森徳雄さん、松永泰然さんたちに連絡して、残念だが現在の事情ではやむを得ないのではないかとの理解を戴きました。

以上、皆様にお知らせいたします。

2022年4月29日記



4月の例会報告

会長 渡辺進

23日(土)に4月の例会を山形県人会館で開催しました。

ちょっと涼しくなって来ましたがお元気でお過ごしのことと思います。

1) 3月の会計は了承されました。会員の皆様の会費と寄付でかなり余裕のある残高になっています。

2) ベロ・オリゾンテの荒木さん(9期)がサンパウロのジュンジアイに引っ越されたそうです。

3) 会員皆様のご懸念でありました南米産業開発青年隊65周年記念大会の件ですが、コロナ禍がまだまだ収束したとは言えず、すでに2年のという時間も過ぎてしまいました。諸々な事を踏まえて役員の皆様で相談した結果、残念だが65周年記念大会は中止にするということで決定しました。会員の皆様のご了承を宜しくおねがいします。

出席は長田さん、小山さん、盆子原さん、猪口さん、渡辺でした。

5月の例会報告

会長 渡辺進

5月21日(土)午前10時より山形県人会館で開催しました。

1) 4月の会計報告は承認されました。

2) ガタパラ移住地の小島さんより小山さんに連絡がありました。7月に60周年記念大会を開催するとのこと。ガタパラ執行部ではこの時期〈コロナ禍〉ですので各団体に招待状を送るのをやめにしたそうですが、コチア青年と青年隊には送ることになったとのこと。

渡辺が車を出すので皆なでのんびりパセイオ気分で行ってみませんかということで、また相談する事になりました。

3) ピニエイロスのコチア青年事務所が閉鎖されたそうです。時代を感じる淋しいことです。

4) 円光寺での慰霊碑清掃は8月の土曜日または日曜日に、慰霊祭は9月の日曜日におこないましょうと言う事になりました。円光寺とお坊さんへの連絡を鈴木さんをお願いします。鈴木さんには渡辺から連絡すること。

5) 日本の青年隊OB会からの連絡で、静岡県立富士宮東高のグラウンド整備を南米産業開発青年隊9期生が渡伯前、当然ですが長澤先生の指示でおこなわれたと思われます。その時の東高からの感謝の記念碑がこのたび校舎改修の為、廃棄ならびに移転の打診がありました。OB会では記念碑設置継続と記念碑説明をあわせて東高敷地内においてもらう方向で進められているようです。9期の先輩方の1歩をぜひ残していただきたいです。9期の竹谷さんは東高造成工事の記憶があるそうです。同じ9期の貝田さんには記憶がないそうですので、9期全員でおこなった感じではないようです。日本の光森さんの話ですと、長澤先生は記念碑的なものを残すのが好きだった様ですので、日本には他にも存在する可能性はありそうです。とのこと。

せんべいあり 饅頭あり 果物ありの何でもありの楽しい月例会でした。出席者は、曾我さん、盆子原さん、長田さん、小山さん、渡辺でした。

後日、慰霊碑清掃と慰霊祭に関して決まったことなどは次のとおりです。

- 1) 慰霊碑清掃は8月20日(土)に行う。
- 2) 慰霊祭は9月18日<日>にする。
- 3) 市役所、お坊さん、お寺への連絡と予約を鈴木さんをお願いします。
- 4) 食事等の細部は6月の例会で話会いましょう。



【お知らせ】

下記の方々のメールアドレス・電話番号・住所です。
曾我義成、荒木昭次郎、長田譽歳、渡辺進各氏からお知らせを頂きました。

馬場和義（5期-93）メールアドレス：yasubaba@outlook.com
携帯電話番号：（11）98613-9261

津田浦之助（9期-267）メールアドレス：marie_tsuda@hotmail.com
住宅電話番号：（11）5587-2759

板垣勇蔵氏（9期-260）のメールアドレスは
fabioeka@hotmail.com に変更されました。
そして固定電話は現在使用しておられません。
携帯は変更なしで（41）99622-1690 です。

荒木昭次郎（9期 n.245）さんがジュンジアイへ引っ越されました。

新住所は Sr. Syojiro Araki
Rua Moisés Abaid,155 Apto.202 Torre B
Jardim São Bento, Jundiaí - SP
CEP 13202-500
電話番号は携帯=Celular（11）94550-6627
住宅=Telefone Fixo（11）3963-5449 です。



王国カナリアのもう 1 枚の写真です

表紙の写真と共に写しました。嘴(くちばし)が少し動いているようです。



パイネイラ(Paineira トックリキワタ)の花が満開でした。
今年は何時実が熟し綿が見られるか観察します。2022年4月15日撮影



南青協月間会計報告(3月分)

2022年3月31日迄

Data	Descrição	Débito	Crédito	Saldo
	2月よりの繰越分			27.549,01
07/Mar	年会費 2次三沢貞夫氏(21)		200,00	
16/Mer	年会費 10期斉藤信夫氏(305)		200,00	
16/Mar	寄付 10期斉藤信夫氏(305)		4.800,00	
18/Mar	年会費 8期志方進氏(210)		200,00	
19/Mar	山形県人会会館月例会 Aluguel	120,00		
22/Mar	年会費 9期千田功氏(257)		200,00	
29/Mar	Envelope 会報用 200枚	85,80		
30/Mar	会報 214号 Copia	1.177,25		
30/Mar	会報 214号 Correio	666,60		
31/Mar	年会費 Luiza Hiroe Iwasa Oshima		200,00	
	Rendimento		157,88	
	Total	2.049,65	5.957,88	31.457,24

Bradesco の支店番号と口座番号		Agência 1480 Conta 33226-7 Takatoshi Osada Susumu Watanabe CPF 698.506.588-00 Cheque の送り先 Takatoshi Osada Rua Rishin Matsuda,467 São Paulo - SP CEP 04371-000
05 /Abril /2022		
Extrato Conta Corrente		
Takatoshi Osada Susumu Watanabe		
Agência 1480 Conta 0033226-7		
Saldo	31.457,24	

会報 214 号の会計報告の 8 ページの寄付 7 期吉田茂治氏の R\$400,00 は間違いでした。

正しくは年会費 4 期摂津静氏 (n. 85) R\$200,00

年会費 6 期森慈美氏 (n.103) R\$200,00 でした。

此処に訂正しお詫び致します。



南青協月間会計報告(4月分)

2022年4月30日迄

Data	Descrição	Débito	Crédito	Saldo
	3月よりの繰越分			31.457,24
06/Abr	年会費 8 期 Sra. Rosa Soejima Tanaka(240)		200,00	
11/Abr	年会費 6 期渡辺尊人氏(139)		200,00	
11/Abr	年会費 7 期伊達尚仁氏(150)		200,00	
11/Abr	年会費 7 期藤岡忠三氏(176)		200,00	
11/Abr	年会費 9 期渡辺益男氏(265)		200,00	
18/Abr	年会費 8 期丸谷良守氏(231)		200,00	
23/Abr	山形県人会会館 Aluguel	120,00		
26/Abr	年会費期橋本勝徳氏(168)		200,00	
	Rendimento		180,13	
	Total	120,00	1.580,13	32.917,37

Bradesco の支店番号と口座番号 Agência 1480 Conta 33226-7 Extrato Conta Corrente 05 /Maio /2022 Takatoshi Osada Susumu Watanabe <p style="text-align: right;">SALDO</p>	32.917,37	Agência 1480 Conta 33226-7 Takatoshi Osada Susumu Watanabe CPF 698.506.588-00 Cheque の送り先 Takatoshi Osada Rua Rishin Matsuda,467 São Paulo - SP CEP 04371-000
---	------------------	--



今までのあらすじ

どうしてブラジルに22年もいて人生に成功したのに、わざわざ48歳にしてポルトガルに再挑戦しに行ったのか？ と会う度に聞かれるので、その事情を話すには行くまでの事情が色々あったのです。

その事情を話すために自分史という道のりをたどっていけば分かってくれるのかな～と思って書き始めたのが「よっちゃん」の自分史ということになります。

さてバネSPA（サンパウロ州銀行）のスポーツクラブの一室で治療ベッドが一つの所で、晴れて自分自身の治療所を持つことになってとても嬉しかったが、これからお客さんを集めなければならない苦労がある。

このスポーツクラブのサウナは個人用ばかりで、サウナを終わって水のシャワ～を浴びて帰る場所にマッサージ用のベッドがひとつ置いてあった。目につき易い場所なので中にはマッサージをして貰いたい人がいるのではないか？ そこでシャワーを浴びてそこから帰る人たちに指圧マッサージのパンフレットを渡して宣伝にも精を出した。

サウナをお手伝いしながら、お客さんに私は指圧のマッサージスタであり、色々腰痛や膝の痛み、疲れにサウナをした後はとても効き目がありますと積極的に自分を宣伝したりもした。

その甲斐があって一人二人と客が増えて来て、中には家内が腰の調子が悪いから治療してくれとか、友達の膝が悪く薬や注射で良くならないので何とか頼むよと言う客が少しずつ増え始めて来た。このサウナは土曜、日曜それに祭日だけである。

それで、普通の日も少しずつお客さんが増えて来て、結構経済的にも楽になりかけて生活も安定して来た。

しかし、同居している稲垣氏は自分で美容室を開きたいので、「悪いけど、ここの飯代だとか経費を払っておいてくれないか？ 仕事が順調にいくはずだから、必ず返すから」と頼まれました。

「よっちゃん」は仕事が調子良いので直ぐに快く引き受けた。これが稲垣氏の曲者の始まりであった。

暇な時はアパートの中で彼から教わった女の本物の長い毛でカツラを作る手ほどきを受けていたので暇な時は作っていた。

時間になおすと結構良いアルバイトにもなる。

しかし、後に分かったがその仕事に対して一銭も払ってくれなかった、請求してももう少し待ってくれとの一点張りである。

本物の毛で作るカツラは人造毛と比べて、価格が極端に高く随分と自分ばかり儲けて「よっちゃん」の分を全然払おうとしなかった。

そうこうしている間に稲垣氏はソーシオ（パートナー）を見つけてもう一軒開けることになったので、もう暫くアパートの家賃や諸々の経費を全部払ってくれないか？ と来た。「よっちゃん」は人が良いのか別に今のところ経済的にも安定して何とかやっているので承知した。

まあ、こんな調子でこのアパートで2年位一緒に過ごしました。この間に随分と青年隊の同期の仲間が出たり入ったりで、中には元手が掛からない指圧を覚えにいたり、この「よっちゃん」の指圧治療を覚えて結構治療師の道に進んだ仲間が5人位いましたね～。

青年隊員たちはほとんど手に技術を持っていない仲間が多い、日本で取得した特殊運転免許持っても日本と比べてくその役にも立たない。奥地に行って動いているトラクターや日本で言う特殊車はみんなカボクロ(caboclo、奥地の人、田舎者)達が免許なしで堂々と朝から晩まで動かしている。

幸い日本人は物分かりが早いし、見ただけで簡単に覚える器用さがある。指圧もやっているのを見れば、日本人は大体やり方なんて分かるもので、後は経験を積むだけで自分の指圧法が出来るというものです。そういう訳で随分と「よっちゃん」の治療法を覚えて地方に散らばって行った仲間がいたのです。

さて都会で働く場合ブラジルでは日本の治療の免状があっても法律上は受け付けないので当地の免状を取る事にしました。

幸いに近くにドクターミゲルル、コートマッサージ学校があって、そこに入学しました。

しかし国家試験受けるには当地の中学校卒以上で何かの医学関係の仕事を2年以上している証明書がないと受験出来なかった。厳しかったね。

それで中学の資格を取るために中学校に入って勉強する訳にはいかないので、教育省で中学校卒業程度の試験をパスすれば中学校卒の資格が取れる方法があるとの事でそれを受ける事にした。場所は忘れたがある学校の教室で現れた審査教師は50才位の二世の女の方でとても優しい先生でした。

出た科目はポルトガル語の作文で<貴方のおじさんが近くの牧場に住んでいて、休みにそこに行った>ことを書きなさいとの事でその位ならなんとか書けた。地理はブラジルの州の首府の名前を必ず覚えて行きなさいと言われていたので、地理上の事で早速聞いて来たのがミナス州、バイーア州、そしてサンタカタリーナ州の首府の名前を聞かれたのでスラスラと答えました。

歴史問題は国の祝日と祭日の意味を当てるものでチラデンテスの日と独立記念日が出たのでちゅうちょなく答えたので、「もう良いです。おめでとう！パスしました」と言ってくれた。いや〜、その時の嬉しかった時の事を今でも忘れません。「よっちゃん」はブラジルでは中卒です。誇りに思います。

しかしもう一つの問題がある、医学関係の仕事の証明は？ それでスポーツクラブの中にある理学療法所があってその責任者のドクターに頼む事にした。

Dr. Augusto に実はマッサージスタの国家試験を受ける事になったが、学校でやる試験以外に医学関係に関する仕事を2年以上した証明書が必要です。

と事情を話したら直ぐに理解してくれて、それは素晴らしい事です、ここで私の助手として2年間働いた事の証明書を書いて上げます
と言って彼のサイン入りの証明書を貰った。全く有難い事でした。やはり普段気楽に挨拶してチョコレートをあげていた事が役にたったのではないかと思う。「与えよ、しからずんば与えられる」は真理です。

ブラジルでは州ごとに一年に一回だけマッサージスタの資格を取る試験があって、その当時私のクラスから50人位受けました。州全体で550人位の受験者が有り、一次試験の筆記試験で役半分の250人位落ちました。

2次試験は面接で歴史や地理などでしたが、4月22日は何の日かと尋ねたので即座にペドロ・アルヴァレス・カブラルがブラジルを発見した日ですと即座に答えたら「もう良い」と言って無事第2次試験をパスする事ができた。面接試験官が一人でするので、スラスラと答えればこの受験生は結構勉強しているな~と思うのでしょうか。下手にもぐもぐしていれば直ぐ不合格の烙印を押される。

何せ受験生が多くそれも一人で採点するのですから大変だと思います。ましてや日曜日だから早く帰ってサッカーの試合でも見て、セルベージャ（ビール）を飲みながら過ごしたいと思っています。何せブラジル人は生まれる時はサッカーボールを抱いて生まれると言われていました。

さて3次試験は実地と口頭試験と一緒に実地試験部屋に6人呼ばれて各人に体の部分（腕、腹部、背中、脚など）を割り当てられて、その部分をマッサージする。そしてその部分の筋肉の名前や神経の名前などを聞かれるのです。

それが分かったので我々は直ぐ6人でグループを作り、各人の得意な部分を選ぶ事にして待っていた。

そして我々の番が来て部屋に入ったら試験官がこれから体の部分をマッサージして貰うと言うので、我々が積極的に何処どこをやりますと言ったら、直ぐOKが出たので助かった。

「よっちゃん」は腹部を担当することにしていたのですが、さすがに緊張して腹部は正式に ABDOME（アビドメ）と言う所を一般の呼び名で BARRIGA（バヒーガ）と言ってしまったのでこれは減点されるかなーと思った。バヒーガは日本語でオナカと言います。間違っはいいないが腹部はちゃんとした名前で腹部です。

皆がやり始めてなんとか終わったら、試験官は「全員パスだ！」となったので部屋から出てお互いに抱き合って喜びましたね～。到頭無事に当地のプロのマッサージスタの資格が取れた事になったのです。「ケレール・エ・ポデル」（欲することは出来る事だ）、全くそうですね。

しかしもう一つ今思えば随分と冷や汗をかいたものです。筆記試験の時に何とか書いていたら、隣の友達がそこは違う、こうだと素早く見せてくれたのであっと思い出して書き直したりしたものです。熱心に勘違いしながら書いていたのですから友達様さます。

だがもう一箇所どうしても思い出せない重要な筋肉の名前があったのですが、近くと同級生が声だかに名前を言ってくれたので、周りの生徒たちにとっても凄く良かったと思う、試験官は声を出すなど言っただけでした。ありがたかったね～。本当にブラジル式ですよ。

後日学校へ行ったら、当校から50人受けたが10人が落ち、受かったのは40人でしたので校長先生はあまり面白くなかったみたいで「見ろ！岡井は外国人でポルトガル語もまあ、まあ～なのによく勉強して9番目の高成績で受かったのだぞ～」。

「それに引き換えて落ちたお前たちは恥ずかしく思わないのか！」と「よっちゃん」をととても褒めてくれました。嬉しかったね～。校長先生も鼻が高かったみたいです。

さてさて、人生は面白いものです、生きている間にどういう人間と出会うかでその人の運命が決まって行くような気がします。

ある日「よっちゃん」と稲垣氏と柔道家の佐藤先生の3人でリオデジャネイロに視察に行きました。

やはりこう言う商売はリオでやった方が面白いのではないかな？

海が好きな「よっちゃん」はリオデジャネイロのコパカバーナの海岸を夢見ていました。そういう所で仕事をしたら気持ちいいだろうね～と。

コパカバーナと名前を聞いただけでなんかロマンチックになるような雰囲気の名前ですね。後日そこに2箇所の治療所を開くとはその当時は夢のまた夢でした。

さてある日の夜、リオデジャネイロ行きのバスターミナルで出発の時に、パウロ西が「よっちゃん」にあちらに行ったら、この人を尋ねたら良いよと、カードをくれたのでそのまま見ないで胸ポケットにしまいました。

一緒に行く柔道の先生である佐藤先生は昔リオに住んだ事があり、その知り合いのおばちゃんの所を最初に訪ねる事にしていたので、胸ポケットのカードの事は全然気にしていなかった。

朝方サンパウロから8時間かけてのオニブス（バス）が無事リオのバスターミナルに着いた。早速佐藤先生の知り合いのおばちゃんを尋ねに行きました。このおばちゃんの子がフェルナンドと言って16歳の頃リオで

長島先生の所で柔道を始めた。その先生の世話で柔道を習いだしてメキメキと上達した人間であった。

それでその長島先生はブラジル語を全然話せなく、日本語ばかりでフェルナンドに接していたのでフェルナンドはそんな雰囲気なのですから日本語を覚えてしまったのです。

「よっちゃん」が MIZUKI で働いていた時にその二階には柔道の道場があって、彼フェルナンドは柔道の先生として、そこで佐藤先生と柔道を教えていたのです。それがきっかけでフェルナンド先生の事は良く知っていましたので、直ぐに気楽におばちゃんと接する事ができました。

そしてトマカフェ（朝のコーヒー）して色々と世間話しをしている時に何気なく胸ポケットに手を入れたら、パウロ西がくれたカードに触ったので取り出して見て名前と住所があった。それでおばちゃんにこの住所は遠いのかね？ と尋ねたら歩いて 10 分もかからないよと言ったのでそこに尋ねて行く事にした。別に約束した人はいなかったからね。

もしこのおばあちゃんがそこに行くにはオニバスかタクシーで行かないと遠すぎると言ったら、多分行かなかったと思う。何処の馬の骨か分からない所にわざわざ時間つぶしてまでも行こうとは思わなかった。

しかし人の運命は面白い、ここに尋ねに行った人間こそ「よっちゃん」の人生の考え方、目標、目的などをガラリと変えてくれた運命の出会いの人であって、世間ではグルー（人生の達人）と呼ばれている、まさに「よっちゃん」にとってはグルーそのものの人物であった。

今回はそのグルーを紹介しましょう、乞うご期待！



ウクライナの反転攻勢はあるのか

サンパウロ 9期 貝田定夫

ロシア軍によるウクライナの首都制圧を目指した電撃作戦は失敗に終わった。ロシア軍は、ウクライナの北部から首都キエフに向けて部隊を侵攻させたが、ウクライナ軍の頑強な抵抗に会い、1ヵ月以上たってもキエフを攻略できなかった。これでロシア軍はキエフ制圧をあきらめ北部から撤退した。

ロシア軍は作戦を変更し、既にウクライナの東部と南部に進駐していた部隊に北部からの部隊を合流させ補強した。その狙いは、ロシア本土から南部のクリミア半島まで、陸続きの回廊を作ることにあるらしい。戦争は第2段階となり、東部と南部が主戦場が変わった。戦況は一進一退で、ロシア軍とウクライナ軍の我慢比べの様相を呈している。

ロシア軍が撤退した後、ウクライナのゼレンスキー大統領が視察した。ゼレンスキーには彼の側近と欧米の記者団が随行していた。北部の都市は空爆と砲撃により建物や住宅が破壊されて廃墟となり、いたるところに戦車、装甲車、自動車などの残骸が散在していた。さらに市民の死体が路上に放置されていて、まさに地獄絵図としか言いようがない。市民の死体は何日もいや何週間も放置されたままになっていたものと思われる。

ウクライナ北部に侵攻したロシア軍を止めたのは、アメリカ製の対戦車ミサイル「ジャベリン」や対空ミサイル「ステインガー」の働きによるものだった。ロシアの地上部隊は戦車を前面に侵入してきたが、これを迎え撃ったのはジャベリンである。

ジャベリンは長さ 1,2 m、重量 22 kg、射程 2500 m、歩兵が肩に担いで持ち運びが出来、兵士が肩に乗せて発射する。ジャベリンの最大の特徴は、目標に近づきつつ上昇して、戦車を上から攻撃できることである。戦車に出入りするハッチが上部にあり、この部分が弱い。この急所にミサイルが命中すれば1発で戦車は破壊される。前触れもなく突如として飛んで来るのは戦車にとって最大の脅威である。

軍事情報によると、「戦車の重量は約 60 トン、時速 40km/h、燃費は非常に悪く 1 リットル当たり 200~400m、補給なしの航続時間は半日程度、そして戦車 1 台の価格は 3 億~5 億円。一方、ジャベリンの値段は約 2100 万円で、飛んで行くミサイルは 1 発 1000 万円」となっている。

ジャベリンは、95%の命中率がある精密な誘導兵器であり、発射したミサイル 1 発でほぼ確実に 1 台の戦車を仕留めることが出来る。ウクライナは 1000 万円のミサイルで 3 億~5 億円もするロシアの戦車を破壊する。ロシア側の損害がいかに大きいか分かる。

アメリカのバイデン大統領が秘密兵器として注目を浴びる「ジャベリン」の製造工場を視察した。場所はアラバマ州にあるロッキード・マーチン社の工場。バイデンは工場の労働者達を前にして「あなた達は数多くのウクライナ人の生命を救った」と言い、彼らを賞賛した。ジャベリンにかける並々ならぬ期待の程が見てとれる。

ロシア軍は最初から戦車を投入したが、ある軍事評論家はこの作戦を疑問視し次のように述べている。「戦車を先行させ歩兵がついていく作戦は、第 2 次世界大戦で行われていた古い戦術である。現在では、ミサイルや無人機など先端技術を駆使した高性能の武器があり、戦車が最初に出る作戦などはやらない。

例えば、湾岸戦争の時、アメリカを中心とする多国籍軍は空爆やミサイルによる航空戦力でイラク国内を徹底的にたたいた。5 週間後に地上部隊が入ったがほとんど破壊さず地上戦は 5 日で終了した。

ただ、5 週間にもわたって航空戦力で攻撃するには莫大な物量を必要とする。ロシアがこのような戦略を取らなかったのは物量に制限があることと、ウクライナは高性能の対戦車ミサイルを持っていない、と見たからだろう」と分析している。

別の軍事専門家によると、アメリカと NATO 加盟国がウクライナへ武器を提供し、特に「ジャベリン」がウクライナ兵士に行きわたってから、前進して来るロシア軍の戦車や装甲車に向けてジャベリンが発射された。

その結果、侵攻してから 1 ヶ月以内でロシア軍の戦車と装甲車合わせて、2000 台が撃破された。戦闘機やヘリコプターに対しては携帯式ミサイル「スティンガー」で効果的な戦いが出来た。さらに、トルコ製の無人攻撃機がロシアの後続部隊や砲兵部隊を攻撃して成果を上げた、と述べている。

戦争は第 2 段階となり、アメリカと NATO 加盟国が新たに提供する武器は攻撃用が多く、ウクライナ軍の戦闘能力は高まっている。例えば、アメリカは 3 種類の自爆型無人機、つまり使い捨ての自爆ドローン(カミカゼドローン)を供与した。

これらは「スイッチブレード 300 と 600」、「フェニクス・ゴースト」で、高度な精密誘導兵器である。中でも「フェニクス・ゴースト」は大型で破壊力が大きく、戦車、装甲車、弾薬や燃料を補給する部隊、防空ミサイル部隊などを探し出して、正確に突入して破壊することが出来る。

精密誘導兵器で最も衝撃的な働きをしたのは、イランのソレイマニ司令官をピンポイント攻撃したことである。使用されたアメリカの高性能無人攻撃機はミサイルを搭載して 14 時間飛び続けることが出来る。バグダッド国際空港近くを走行中の自動車にミサイルを命中させ殺害した。このように現在の高性能な精密誘導兵器は確実に目標物を破壊できる。

ゼレンスキー大統領はこれらの攻撃用武器を手に入れたことにより、強気の姿勢となり反転攻勢を狙っている。これまでロシアに占拠された領域を奪い返す考えのようである。ごく最近の情報によると、ウクライナ軍が反撃に転じ、制圧されていた東部のハリキウ州を奪還したと伝えている。

4月の末、アメリカのブリンケン国務長官とオースチン国防長官がNATO加盟国の代表者らと協議した。会議でオースチンは「ロシアが敗北し近隣諸国への侵攻を繰り返さないように弱体化する」と強調した。

これは、ロシアが軍事的に立ち上がれなくなるまで徹底的にたたくことを意味している。資金と物量に勝るアメリカがとことん最後まで行くような気配である。これに対してプーチンは核兵器の使用を仄めかすなど緊張が高まっている。

プーチンは強気の姿勢を崩していないが、ロシアには大きな弱点がある。ロシアのアキレス腱とも言うべきもので、経済である。2021年の世界各国の国内総生産(GDP)を見てみると、ロシアの国力は韓国に次いで世界11位である。ロシアは軍事大国ではあるが経済小国で、それも天然資源依存の経済構造である。プーチンが大統領就任後は原油と天然ガスの価格がまあまあ良く輸出拡大で成長してきたが、今日に至るも原油と天然ガス依存から脱却していない。

ヨーロッパ諸国はこれまでロシアの原油と天然ガスに依存していたが、ウクライナ侵攻に反発してロシアからの輸入を減少しようとしている。代替先を探すには時間が掛かるので、今すぐというわけにはいかないが、時間の経過とともにロシアにとって打撃になっていくのは確かである。

さらに世界的な景気の後退により、原油や天然ガスの価格が下落するような事態になれば、もはや戦争をしているような余裕は無くなるであろう。

戦争は長期戦・持久戦の様子を呈してきたが、欧米の支援があるウクライナは有利になるが、ロシアは在庫の兵器・弾薬が無くなれば終わりとなる。はたしてどのような展開になるのだろうか。



私の住んでおります、パラナ州の西の果てイグアスーでも、今、秋が深まっています。

この投稿文を書いている今日は5月下旬に入ろうとしております。スマホやテレビの天気予報では、明日の週末は、5℃になるとか？ これはイグアスーの街の温度でして、イグアスー・カタラッタス空港の近くにある集落に、私は住んでおりますが、此処は何時もイグアスーの街よりも、温度が1-2℃低いのです。

ですから明日の我が家での温度は3-4℃になるかと思えます。低地での地温はもっと低いでしょうから、そんな所はもしかすると霜になるかもしれません。

昨年は6月に2度、7月には3日連続で-1℃になって、私の家の敷地内には、ジャッカ（ドリアン）イッペーローザ（ピンクの花が咲くイッペー）マンガ（マンゴー）、エスパトージア（Espatodea、この辺ではアフリカのチューリップなんて呼ばれています）があり、これらはみな高さが10m-15m程になる木ですが、霜と寒風による被害で、直径15cm程より細い枝は全て枯れてしまいました。

我が家のイッペーローザは15m程の高さがありましたが、横に電線が通っており、枯れ枝が腐って電線の上に落ちますと、大変な事になりますので、若い連中に枯れ枝を切らせる事にしました。はしごをかけ木登りをして、10m以上の高さまで、モトセーラ（チェーンソー）を上げての枝切りは、少々危険で難しい仕事でしたが、よくやってくれました。

今ではそれら霜にやられた木々には、緑の葉を付けた新しい枝が繁っておりますが、今年の冬は、どうなりますか？ 毎年冬になりますと、霜が気がかりです。

あれは忘れもしない、1975年7月15日の事になりますが、なんと当地に雪の降った事があるのです。降雪のあったのは、後にも先にもあの日だけです。

積るほどの事ではありませんでしたが、雪の降るのをみるのは、初めてと云う人達ばかりで、大勢の人達が家の外に出て、はしゃぎ回っておりましたね。しかしあの寒波で、ブラジル最大のコーヒーの産地であったパラナ州のコーヒーは終わり、以後はパラナ州よりも土地は痩せているが、霜の害のない北方へと、コーヒーの産地が移ってしまいました。もし私がコーヒー農家だったら、昨年も大きな被害があった事でしょう。

次ページは我が家の桜の若木と錦鯉の写真です。



「小さな花を付けた桜木」

世界は地球温暖化で騒いでおりますがイグアスーでは昨年も今年の夏も、温度が40℃になった事一度もありませんでしたが、昨年の冬は霜が結構ひどかった。

そんな昨今ですが、一昨年50cm程の桜の苗木を60本程植えました

しかし、昨年7月の霜でより小さな苗木は、数本枯れてしまいましたが、50本以上の苗木は、今では2倍から3倍の大きさに育ち、3月には日本と同じ様に、花を咲かせてくれました。



ところが、3月頃に咲き出した小さな花は、今でも、あちらが咲き、此方が咲いたりしてとまりません。このままブラジルの春である9月頃まで咲き続けるのでしょうか？ 私は見る事は出来ないであろう10年20年先には素晴らしい花を咲かせてくれるでしょう。



「孫の手に 餌ねだり来る 錦鯉」



Sete Quedas de Guaíra, Pr (antes de desaparecer pelo lago de Hidrelétrica Itaipu) パラナ州ガイーラのセッチ・ケーダスの滝 (イタイプー発電所のダムによる水没前の写真です)

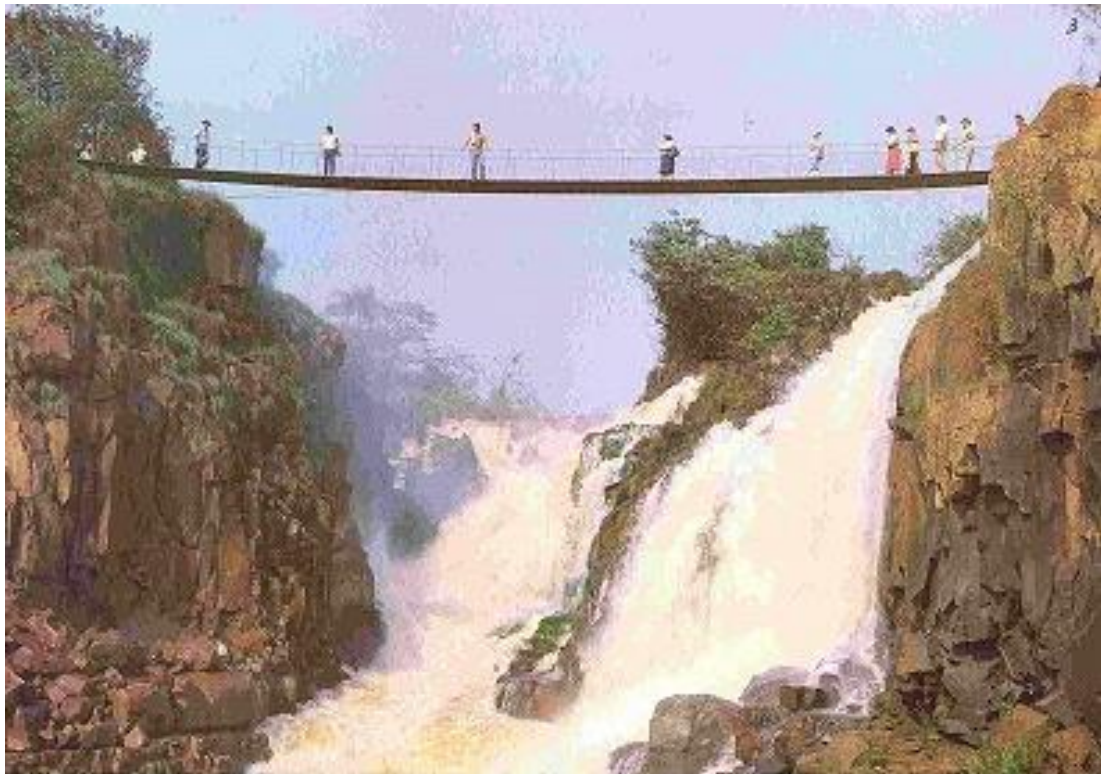


イタイプー・ダムは1982年に貯水開始、1984年に発電開始した。ネットにあったグーグルによる上空からの写真のため、目の前で水が落ちている様子(次ページに写真あり)は見えません。この写真上部と左側の白く泡立っているところは滝と急流です。



私たちの40年、アルゼンチナ丸同船者寄稿集 (1966年)

【幻の滝セッチ・ケーダス】 HP 編集管理責任者 和田 好司
南米産業開発青年隊 荒木昭次郎さんよりのお便り



【幻の滝セッチ・ケーダス】に掛かっていた吊り橋

建設省派遣の南米産業開発隊の移住者が合計326人に達し私たちの第12次航でも第8期生の33名と一緒に来ました。私たちより1年早く来伯され一貫してダム建設のお仕事に従事されたダム男の荒木昭次郎さんからのお便りです。

妹の多加代を時間の関係で荒木さん達が建設に携わった世界一のダム、イタイプー水力発電所を見せて遣れなかった事への悔いが残ります。悔いと言えばイタイプーダム建設で水底に埋没してしまった【幻の滝 セッチ・ケーダス】を見に行けなかった事です。

グアイラーにあった【セッチ・ケーダス】の滝は消え去る滝として当時有名でした。私の父をイグアスに連れて行ったのが1981年の夏で長女弥生が4歳、次女茜が1歳、三女の小百合はまだお腹の中での胎教中でそれこそ残念ながら足を伸ばさず幻の滝になってしまいました。

翌年に大惨事の事故があり、行かなくて良かったと胸を撫で下ろしましたが、今になり当時まだ4歳だった弥生がどうして連れて行って呉れなかったのかと文句を云っています。覚えていようがいまいが幻の滝になる前に行ったという事実が大事であると主張しています。

阪口多加代さんのブラジル記を拝見しまして、我々がブラジル1年生だった時の感じが多々思い出され大変楽しく拝見しました。

特にイグアスでは滝を上下左右から眺められ大変満足された様子で良かったですね。ただ残念に思いましたのはフォス・ド・イグアスのすぐ近く、パラナ河上流にあるイタイプーダムを見学されなかった事です。

ブラジルの土木建設技術を賭けた世界一のダムで、我々日本人一世は7名程それに二世も十名ほどですが従事しました。

雨期にはダムの「余水吐け」部分から大量の水が弧を描いて吐き出され虹を伴って大変豪快な眺めです。

私たち40年生の殆どが知っていると思いますが、フォスの町から150km程パラナ河上流にセッチ・ケーダスと言う滝があったのですがイタイプーダムのために水没してしまいました。イグアスのように水が垂直に落下すのと違い、ブラジル側からの水は溪谷に沿って7ヶ所ほどにまとまり濁流となって岩を咬んで斜めに流れ落ちる様は豪快と言うか恐怖をそそる眺めでした。その7ヶ所の流れを渡るのにつり橋が掛かっていましたが82年1月に事故でつり橋が落ちて29人（一部の記録では14人となっています）の観光客が落ちて死亡しました。

当時私はイタイプー工事に働いていましたが、コンクリートの主要工事が1段落してペルナンブーコ州のやはりダム現場に転勤になるので、やがて水没するセッチ・ケーダスの滝を見納めしようと家内と3人の子供を連れて出かけオッカナビックリ渡った数日後の事故で、夜8時のテレビニュースで知った時は家族一同驚いて鳥肌がたってしまいました。

土木工事に長い間関わっている関係で、工事場で簡単な仮設用のつり橋なども手掛けますが、あの橋はつり橋とはいえない綱渡りの綱を素人でも渡れるようにした一番簡単な作りでした。

普通つり橋は主ケーブルを両岸の支柱にたるみをつけて渡しそれからワイヤーを吊り下げて歩行用の木材を固定するのですが、それが主ワイヤー2本をたるみが少なくなるようにすごい張力を掛けて両岸のアンカーに直接固定し（綱渡りの綱）それに歩行用の木材を固定、その上に手すり用のワイヤーを両側に通した簡単な作りでした。

何年も風雨にさらされたケーブルは張力も限界に近く、またアンカーの取り付け部も錆びが出ていたようで、有名な観光地になって毎日数百人も渡る橋では早急に改善すべきでした。その後ダムので水で地域一帯が水没し事故の跡はあと形もなくなりましたが大変痛ましい事故で、今でも思い出す度我が事のように心が痛みます。

なお、滝と吊り橋の写真は、偶然な事に当時パラナ州スポーツ観光課と建設会社ユニコン社でセッチ・ケーダスの滝の思い出を一冊の写真集にまとめたものをイタイプー社から貰っていましたがその中から選んだものです。



福岡先輩来宮そして、松永先輩との再会

産業開発青年隊同窓会長 鈴木 浩明

令和4年4月5日、北海道のブロック長を務めていただいていた福岡先輩が、新入社員の研修の引率で富士教育訓練センターにこられました。

2年ぶりの再会でした。本日、興徳寺の松永先輩を訪れると聞き、興徳寺で桜を見ながら3人でお話をする時間ができ、松永先輩の壮大な夢を聞くことができました。

千年後に、桜の植樹五万本を終了させ、興徳寺を中心にした桜の里をつくるという非常にスパンの長い、壮大な夢ある物語です。

そのために、針葉樹を伐採した後の、管理を行い、桜や広葉樹の植樹を行いながら山間地の保全活動を行っています。

また、柚野中学校の卒業の記念品に、桜の苗木を送り、卒業生の自宅の一本桜の植樹を行い、将来の活動に対する啓蒙活動の一環として活動されています。

そして、自身の夢として、28年後百歳になり、興徳寺の桜に囲まれ、桜吹雪のなか、禁酒を解き、日本酒を飲むそうです。そして、うみゃーと、一声発し、先輩を慕う方々の見守るなか、穏やかに一生を終えることが最高の夢であると楽しそうにお話になりました。

もし、ここに長澤先生がいれば、「よし。やれ」と言われ、「富士の如く美しく尊厳なれ。」と書かれた書の中に、桜の花の絵を添えて一筆書かれるだろう。と懐かしそうにお話になりました。

私も、福岡先輩も松永先輩の、壮大なロマンある物語をお聞きし、やはり、ブラジルに夢を持って行かれた先輩のスケールの大きさに感激しました。

今日は、力強いパワーをいただきました。

次ページの写真3枚をご覧ください。



富士山と菜の花がよく似合います。



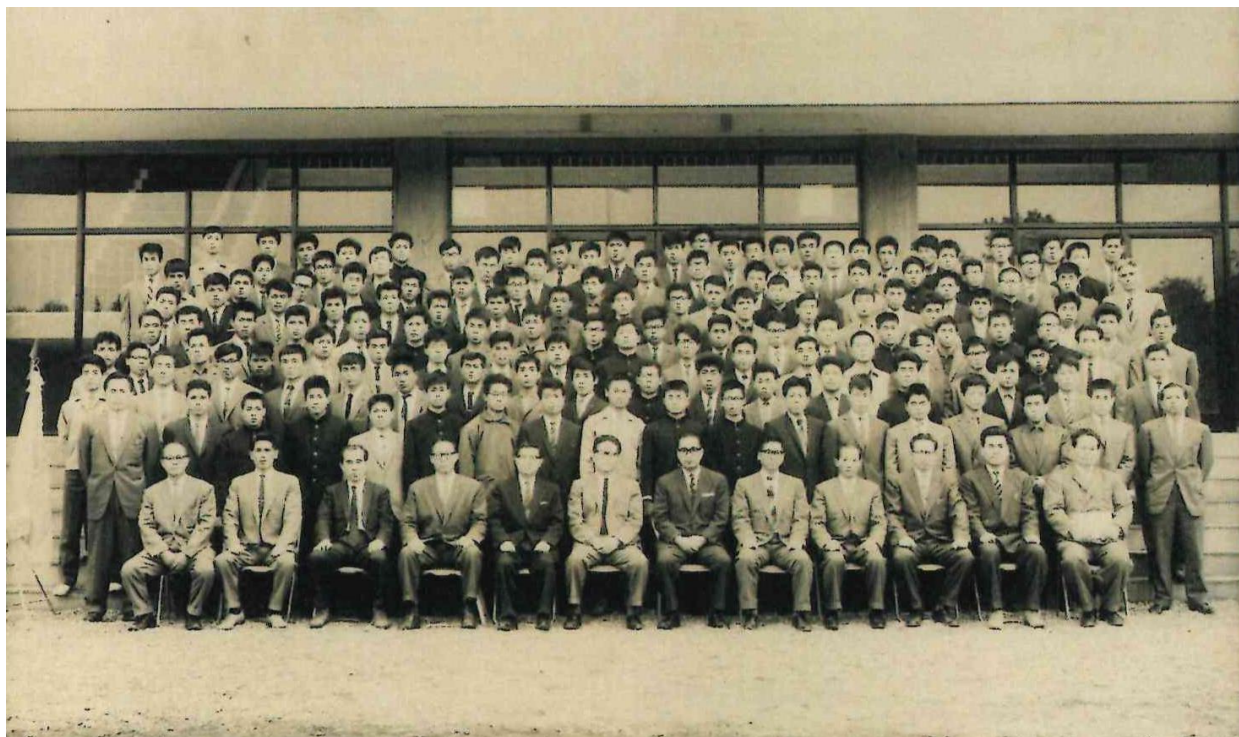
富士山とチューリップもよく似合います。



松永先輩と福岡先輩



日本での10期生の写真 日本の鈴木浩明OB会長から頂いたもので、ポルトガルの岡井さんに見ていただき10期生たちだと判明しました。前列中央右側に長澤所長、その右が新見さんでしょう。前から3列目の右端は前田さんでしょうか。



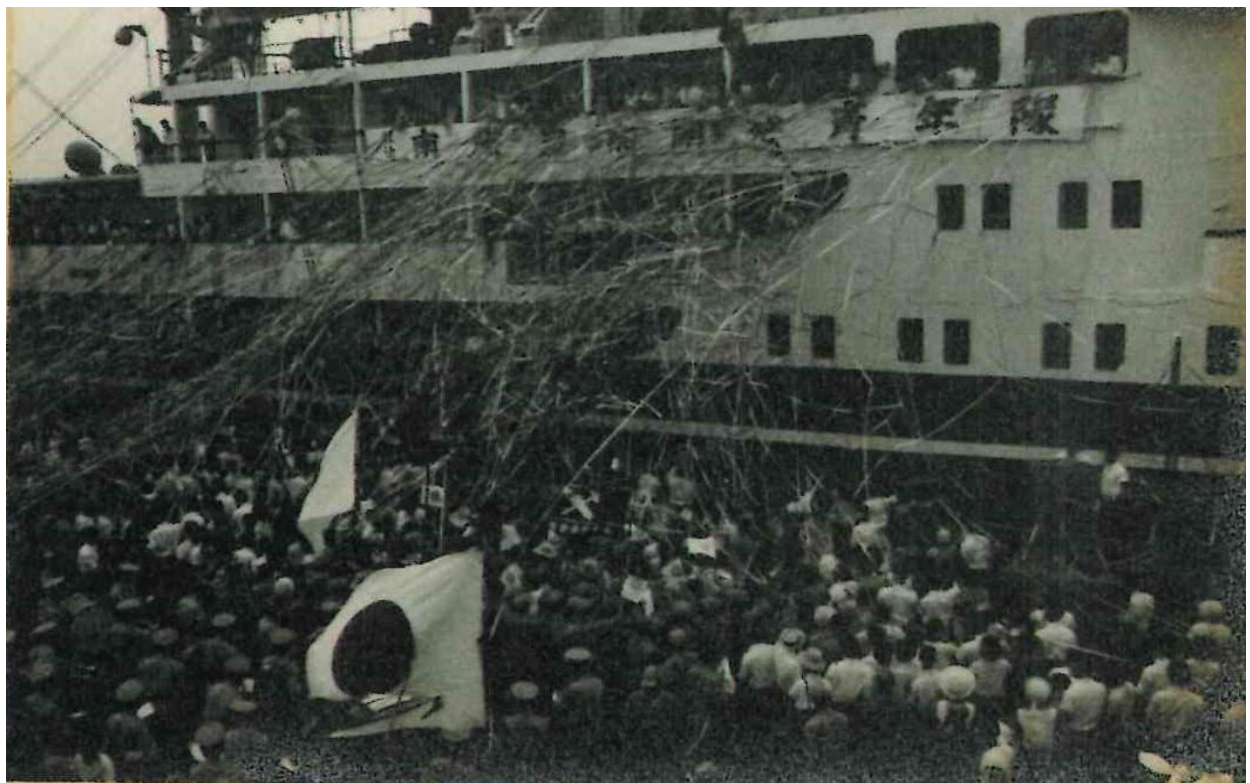
上記の新見さんも前田さんも当時の建設省の職員だったはずですが、役職名は忘れましたが、どなたかご存じの方はお知らせください。

左写真は訓示または激励していると思われる長澤所長で、懐かしいです。今、お会いしたら多くの談笑で彼は泣いて喜ぶことでしょう。

次ページは乗船寸前と出航時のものです。



みんな笑って、頑張るぞ！



テープを持って、「元気でね！」 ◆

不整脈

サンパウロ 8期 長田譽歳

不整脈について私が知ったのは南青協の第一回目のイグアス旅行のパラグアイ国、アルゼンチン国、ブラジルの三国国境地点の近くを十期の杉江勉さんと2人で歩いていた時に彼が言うのには自分は心臓の循環器の不整脈があり、こんな急な坂道は苦手だと云われました。どの様な症状があるのかと聞くと、急な坂道を登るときは心臓がゴトゴトと踊り息切れがすると言われました。

その後何回か会っても元気な様子なので良くなったのだと思っていました。

南青協の会合にも積極的に参加していました。十数年して杉江さんが亡くなったけど他の病気で亡くなった様に聞きました。

私も4~5年前に循環器系統の医者で定期健診で一度心臓の24時間鼓動の心電図の試験をされると言われました。その検査の結果医者から不整脈が有るといわれました。

心配になり家庭医学書を見ると薬療法とトレーニングで治る可能性も有ると書かれていました。その頃朝の散歩の長い急な坂道を登り詰めた後に心臓が踊る感じがしました。

丁度4年半前の3月の下旬にメキシコ旅行に行き、メキシコ市近くのオリザーバ山、標高4690メートルの高山に登る予定でした。4千400メートル位までは4輪駆動のタクシーで上がり、更に400メートルを歩く予定でしたが、食事をして体馴らしの運動をすると心臓がゴトゴト踊り到底頂上まで登れないと思い、私は辞退し半数の4人組みで下山の車に乗り、他の4人は歩いて噴火口の内側まで上がり着きました。私は大変残念に思いましたが行かなくて良かったと思いました。

私は夜眠るのは女房より早く朝は遅く起きるので、寝具の取り込みと、毛布の敷き込みは私の仕事です。その毛布の取り込みに以前は心臓がゴトゴトと鳴ったり、メトロの駅の構内の30段の長い階段を上がるのにも動機がしましたが、一年半ほど心臓の飲み薬を飲んで心臓検査を再度すると異状が無くなり、医者から心臓の飲み薬を取って貰う事が出来ました。今は何時もの急な坂道も然程息切れがしなくなり、メトロの駅の構内の長い階段も余り苦にならず楽になりました。つい二週間前からコロナウィルスの予防接種も4回目をしたので2年ぶりにメトロの電車とバスに乗り気楽になりました。

今は毎朝の四つの急な登り坂と下り坂のあるカミニャーダ（ジョギング）も余り苦にならなくなりました。この登り坂での呼吸の取り方は四つ大きく吸って、六つ大きく吐く複式呼吸を取り入れています。水泳の呼吸は何時も複式呼吸ですので、苦しいと思う事はありません。これから冬に向かいますので、水泳教室も少し力を入れて掛からねばと思っています。今はバタ足に力を入れて水しぶきを上げるようにしています。

音のある世界

今年の一月に入ってから私の子供が私の補聴器の取り付けの予約を入れて、補聴器の取り付けを開始しました。私は知人の話を聞いても補聴器に関して、取り付けた多くの人の話を聞いても、値段が高い割りに取り付けた補聴器の聞こえが余り芳しい話を聞きませんので、余り乗り気になりませんでした。それでも駄目で元々だと思い医者検査をしました。

医者が来週には出来ると言い、そして良く聞こえる様になると言われる。何で良く聞こえる様になるなんて、ぬか喜びに云ったのだろうかと思議に思う。いや待てよ、案外良く聞こえる様に成るのではないかと予感が走る。補聴器が出来上がり、女医が調整して取り付け、良く聞こえるかと尋ねる。雑音も無く案外澄んだ音が聞こえるので良い様な気がすると答える。

今はテレビを聞いても完璧に聞こえるので良かったとほっとしています。南青協の月例会に出席しても話を聞き逃す事もないので良かったと思っています。只電話は取り外して話すので再度の調整が必要かと思っています。

この補聴器の片方の一つは私の四女の姑が亡くなる少し前に購入したもので、医療保険が同じ会社で有効期限内でしたので、全く無料で使えました。天国に行ったら厚く御礼をしようと思っています。

人生いろいろ

私の親戚にジェラウド・ヤカシロの家族がいました。日本名の名字はヤカシロですがどの様な漢字を書くか知りません。初代移民は100年以上

前に福岡県浮葉郡からの出身です。当時鑑識手帳に記録する際、殆どの移民者は、ローマ字体は書けず口頭でブラジル人書記官が記入したのでその様なあやふやな名前になったのだらうと思います。このジェラウド・ヤカシロ氏は私より10歳ほど年長でしたが20年程前に亡くなりました。

このジェラウド・ヤカシロ氏の長女と私の女房の直ぐの弟が結婚していたので、何時も私が田舎に旅行した時は田舎に住んでいる末の弟とジェラウド・ヤカシロと末っ子のサウロ4人で魚釣りをしていました。

サウロの直ぐ上の姉の夫はブラジル人ですがその町、ヴァレンチン・ジェンティウ(Valentin Gentil)市人口3万5千人の三期目の市長です。その家族は以前私の女房の農場の近くの農場に住んでいましたので、40年前から私もその家族を知っていました。

魚釣りの釣り場はサンパウロ州とミナス州の州境でヴァレンチン・ジェンティウ市から70キロメートル程離れたアグア・ヴェルメーリヤ(赤い水)の大きなダムの岸辺でした。

其処にジェラウド氏の昔からの友人の三木田氏の農場内の岸辺近くに釣り小屋が作られていて、何時も泊り掛けで釣りを楽しみました。その三木田氏の農場は500ヘクタール程の広さが有り、牛の肥育専門で農場内には1家族の牧童だけしか住人はいませんでした。三木田氏の家族は近くの町に住んでいてたまにしか農場には来ません。

その三木田氏の農場の境に大きな原始林が残されていて、其処にたて髪を生やした茶色の足の長い狼が生息していて夜中に残飯をあさりに来ます。体高は80センチメートル程で、スマートで見事な物です。まったくの一匹狼で、番(つがい)で歩く事は有りません。

日本で知られているエチオピア高原に生息するエチオピア狼に似ていますが、まったくの一匹狼で、群れで行動はしません。顔は獯猛で凄い貫禄です。

その湖の岸辺に5メートルの6メートル位の檣台が組まれ中央に200リッターのドラム缶に一杯入ったトウモロコシをスコップで撒き餌に朝夕投げるのでその周辺には何時も魚が沢山集まっていました。ですからその釣り場では殆ど毎回大量の魚を捕って来ました。それでも時たま翌日しけが来る時などは全然取れないときも有ります。

そんな時はジェラウドとサウロ親子は水の表面を竿で叩いたり、怒ってと大騒ぎします。この親子は普段は人間が大人しいのですが、辛抱心が全く無く悪い処が良く似ています。

ジェラウドと彼の嫁さんは私より10歳程年上ですが私を呼ぶのに兄さんと呼びます。その子供と孫も皆私を兄さんと呼びます。5人の子供の内私の女房の弟と結婚した長女のみが日系人と結婚して他4人は皆ブラジル人と結婚しています。

末っ子のサウロの嫁さんは中肉中背で中々の美人です。ただ何を考えているのか理解し難い点が有りました。

このサウロとマリアには当時6歳と5歳の年子の娘がいました。この年子の2人の娘は見た目では双子の姉妹かと見間違ふくらい良く似ていました。

誰にも人見知りせずマリアに似て大変可愛い娘でした。我々4人が釣りから帰ってくるとその娘の姉妹は私に兄さん釣れたかと私に尋ね、大きな瞳をぱちぱちさせる。私が山ほど取れたと言うとウワーと喜んで叫ぶ。この2人の少女がこの稿(人生いろいろ)の主人公です。

それから少ししてサウロはマリアと2人の少女を置いて日本に出稼ぎに行きました。日本に出稼ぎに行っても辛抱心とか根気が微塵も無いサウロに気に入った働き口はまったく有りませんでした。一年と半年して12回働き口を変え、着のみ着のままうらぶれてブラジルに帰ってきました。

半年程ぶらぶらして、日本に又行かんと駄目だと云ってマリアと2人の娘を諭し、3人共承諾されたので一家4人で日本に出稼ぎに行きました。その時子供の姉は8歳、妹は7歳でした。

私はマリアの2人の娘は日本の学校に入っても皆から大事にされ直ぐに友達が出来問題無く日本の生活に馴染めるのは間違いないと思いました。それに7歳8歳の年齢が語学を覚えるのに一番良い年齢で半年もしたら相当理解出来るように成ります。マリアも日本で働くのに問題は無いと思います。問題は何もしないでいたいサウロでした。マリアは根気良く働きサウロも時々働いたり休んだりして9年が過ぎ去り、2人の娘も義務教育を終了して働けるようになる。

2人は店の店員募集の看板を見て歩く。同じ店構えの二つの店で店員募集の看板を見付ける。一軒の店は joalheria(貴金属店)他の一軒は butique (acessório の店、アクセサリーの店)。店に入り女性支配人と話すと少し待ってください社長を呼んできますとその支配人は言う、頑丈そうな大きな男が出て来て対応する。2人の白人娘を見て、日本語は出来るかと尋ねる。日本語は読んで書けると答え、就労手帳も問題ないと答える。この店に打ってつけの女だと思い詳しい話を聞き採用する。

この二つの店は組が経営する直営店で時には美人局(つつもたせ)の荒っぽい恐喝も成合にする玄人の店です。2人の姉妹はサウロに似ずマリアに似て頭も働き度胸も据わって、組頭から大事にされる。

サウロの家族が日本に行って時たまだけどもマリアからサウロと2人の娘のメールを送って来て、無事に日本で暮らしていると伝えてきていたのでブラジルの兄弟は無事に過ごしていると思っていました。

先日私の女房が私に携帯を見せて日本語で何と書かれているかと私に言いながら女性の肩の下に書かれた小さい3文字を女性の斜め後ろから拡大して見せる。

肩の下の二の腕の三文字は『武士道』と読める。

私がこの女は誰かと訪ねるとマリアの娘だと答えるので、私はフーと息を吸って唾然となる。幾つになったかと聞くと、上の子が 28 歳で下が 27 歳だと言われる。ほう立派な女に成ったなーと感嘆する。

女のヤクザの組員が有る訳が無いので、その組頭の姉さんと言うことになると思われます。マリアの 2 人の娘がヤクザの姉さんになったのも人それぞれ色々の生き方があると思われます。

私は日本社会にあっては、ヤクザは必要悪だと思います。私はこのサンパウロの家の近くでも夜の 10 時過ぎには徒歩では歩かず車で出掛けます。普通の人間らしき人が此処では強盗に早代わりする危険性があります。それだけ此処には中間層のかっぱらい強盗、泥棒が沢山います。日本では女性が夜中に一人歩きが出来るのは、中間層の悪人が殆ど居ないからだと思っています。

ヤクザが悪人の肩代わりをされているのだらうと思います。ですからヤクザも社会の為に貢献しているのではないかと考えます。そうでなければ昔のヤクザの清水の次郎長が庶民からあれだけ慕われる分けがありません。

そのマリアの娘の刺青の後でサウロとマリアの写真を見せました。もうあれから 20 年の歳月が過ぎたのでサウロも随分年取ったのと何か目付きが悪くなったように見えました。マリアはそれほど歳を取った様に見えませんでした。

私は 6 年したら用事のため日本に行くので、その時にサウロとマリアと 2 人の娘に会おうと思っています。



【備考】次ページからの「インディオと秘境生活」は第 172 号（2015 年 11 月 11 日発行）に掲載したのですが、地図に地名（インペラトリス市）と街道名（ベレン・ブラジリア）を加筆しました。それと、山木源吉さんと話したうえでタピラペ族の当時の最大規模の集落の居住者数を訂正しましたので再掲載します。

いずれ山木さんと会って、その後の話を聞く予定です。

インディオと秘境生活＝青年隊員の山木源吉さん＝ 結んだ友情を育み続ける

ニッケイ新聞 2012年1月1日付新年号特集から転載

南米産業開発青年隊員で、インディオの部落で原住民と生活を共にした人物がいると聞き聖州カンピーナス市の自宅を訪ねて話を聞いた。その名は山木源吉さん（69、山形）。青年隊員としてグアタパラ移住地で半年間働いたすぐ後、インディオの部落で4年間を過ごした。部落を離れて40年以上が経つが、インディオ保護区となった部落の住民に今でも親しまれ、年1、2回は彼らを訪れ交友を深めている。



ペカロッチ族長に貰った頭飾りを被る山木さん

憧れのインディオの地へ

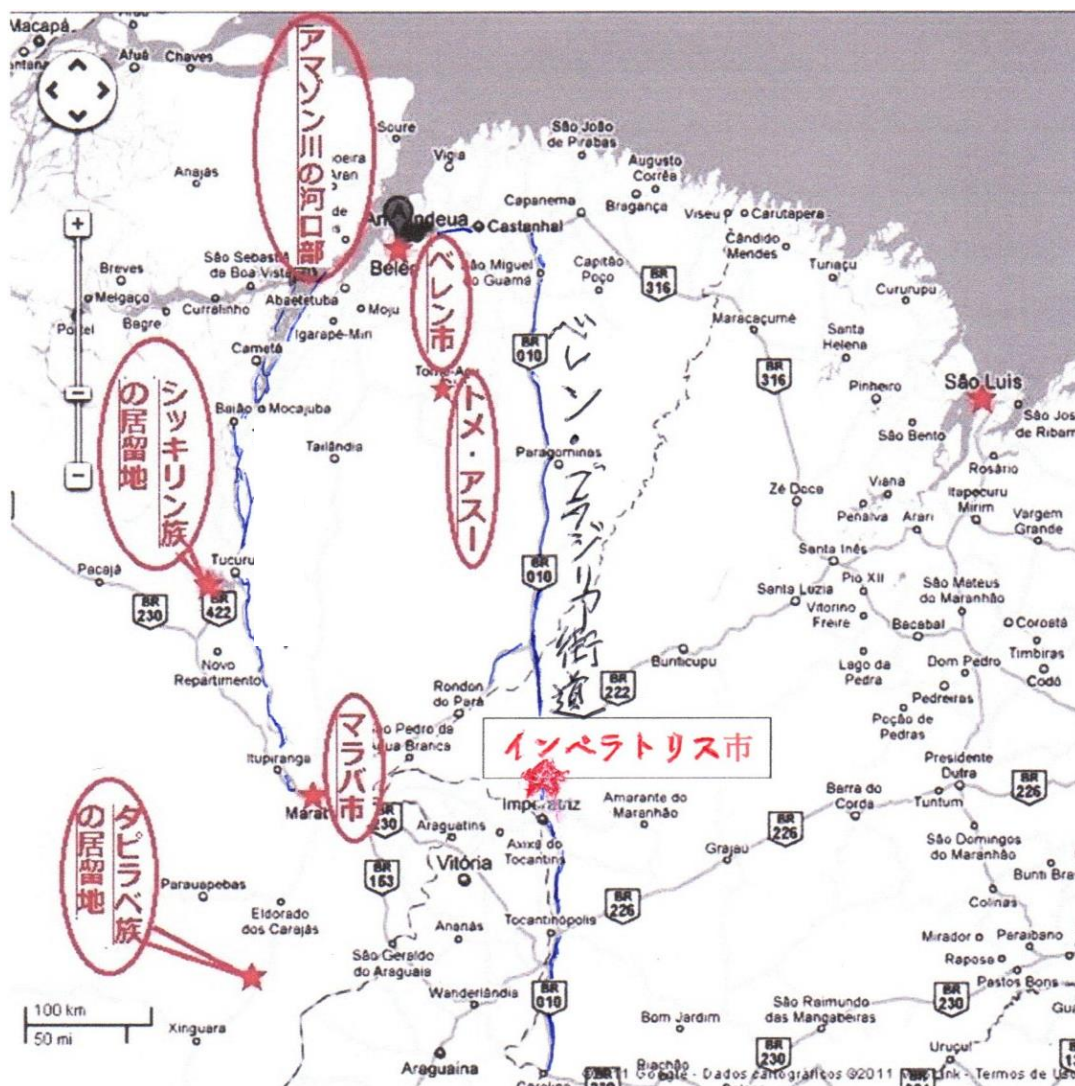
中学生の頃に読んだ1冊の本が人生を方向付けた。本の名は『裸族ガビオン』（杉山吉良、光文社、1958年）、アマゾンに住むインディオに関するルポルタージュだった。「こんな未開の土地に住んでみたい」との夢を抱いた。

当時のインディオ保護機関「SPI」（Serviço de Proteção aos Índios）はキリスト教会と協同でインディオの生活支援を行っており同書には様々な部落の言葉を操り新しい部落と第1コンタクトを取るフ

レイ・ジル（フレイ Frei は Freire の略で、修道僧・師の意。女性なら Freira フレイラです。）という人物がいることが判りました。

「この人に会えば、インディオの部落に連れて行ってもらえるかもしれない」と期待を胸に、地元の農業高校を卒業後、南米産業開発青年隊に入隊した。そして、1962年に来伯、グアタパラ移住地で約半年間用水・排水路のポンプ据付に携わった。

64年、ジル修道士に会える保証はないが、貯めた資金と彼の名を書き留めた紙切れを鞆に詰め込み、一路、パラ州マラバ市を目指した。青年隊らしい冒険旅行だ。1週間かけて約2千キロのベレン・ブラジリア街道を通過、ヒッチハイクでマラニョン州インペラトリス市、更に船に乗り換えマラバ市へと向かった。



有名人だったというジル修道士は容易に見つけることができた。

「ろくにポルトガル語も話せなかったけど、辞書を引いて単語をつなげて来た理由を説明したら、喜んで歓迎してくれた」と懐かしそうに目を細めた。しばらく留まる内に、「一緒に部落に行くか」と念願の呼び出しがかかった。

シッキリン族との出会い

初めて訪れた部族の名はシッキリン (Xikrin)。ジル修道士が連絡を取り、後の支援をカロン神父が引き継ぐことになっていた。マラバ市を流れるイタカイウーナ川の支流に集落があった。

普段は急流で船が通れず、雨季で増水する時期に1、2回だけ訪れることができる「秘境」だ。船で川の分岐点まで上ると、シッキリン族がカヌーで迎えにやってきた。

歩いて来たグループも次々に川の対岸に現れた。侍のように頭に刈りこみを入れ、一糸纏わない大柄の体を戦闘用に赤黒に塗りたくり弓矢を握っていた。顔立ちは東洋人にそっくり、その猛勇な姿に「こりゃすごい」と胸が躍った。



シッキリン族の女性



タピラペ族の女性

上流へはカヌーで行くが、同伴者全員が乗り切れず、若さを買われてか「お前は歩いていけ」と言われた。「言葉も通じないし、全く初対面なのに」とためらうが他に選択肢はなく、部族と歩いていくことになった。

「案内される方なのに、彼らは俺を先頭に立たせようとした。

『道も分からないのに、何で』としきりに抗議して一人を前に押しやると、怖がって後ろばかり見ていた」。部族での略奪が日常茶飯事のインディオにとり、密林で仲間以外に背中を見せることは命とりになる。「生き延びるためのルールに違いない」と、異なるルールが支配する世界に訪れたことを実感した。

口と尻からブクブク泡が

夜は安全な場所に野宿を構えた。道中捕まえた猿を皮もはがず丸ごと焚き火に豪快に放り込み、焼いたもので夕食をとる。

「腸が内部で破裂する、ボンボンという音が聞こえた。口と尻からぶくぶく泡が出て、顔が焼けて歯がむき出しになったのには参ったよ」と、当時の光景が未だに忘れられないというように苦笑いを見せる。

遠征の時は部落から食料を携えるが、「蓄えるという習慣がなくて、腹が減ると満腹になるまで食べてしまう。食料は数日でなくなって獲物が見つからず腹が減ることもあるが、『なければ仕方がない』という考え」。今、食料にありつけることが全てなのだ。

1日半後、部落に無事到着。椰子の葉で葺いた屋根を、木の柱で支えたものが住居だった。

ポ語は通じなかったが「『これは何?』という意味の『マナカミジュク』を繰り返して部族の言葉を覚えた。雨も川も水も全部『ナ』だった。語彙が少なく、色んなものを同じ言葉で呼んでいた」。

女がマンジョッカやバナナを植え、男は原始林を拓き、狩りをした。狩から帰ると、豚、バク、猿、鳥など捕れた獲物ごとに異なる歌を歌い、部落にたどり着く前に仲間に獲物を知らせた。

獲物は椰子の葉の硬い葉脈をナイフ代わりにしてさばき、地面に穴を掘って火を起し、中で熱した石で調理した。「調理といっても塩もない。だから肉は絶対洗わず、そのまま焼いて肉の塩分を摂取する。物事はうまく出

来ている」。

食料が不足すると椰子の実を食べた。落ちて何カ月も経ち、腐りかけたものなら割ることが出来る。「白い幼虫が入っているのに当たると大喜びしていた。こんな虫…と始めは思ったが、あんなに喜ぶんだから美味しいのだろうと思って試してみた。噛むと口の中でパンッとはじけて、椰子油を濃厚にしたような味がして意外とうまかった」。彼らが食べるものは何でも口にし、狩りにも参加し生活になじんでいった。

神父たちが年中訪れることができるよう、猛暑の中、テコテコが離着陸できる飛行場整備が引き受けた仕事だった。仕事を終えて集落へ戻る度、昔戦争で鳴らしたというベツカロチ族長が木の実やマンジョッカを振る舞い、労働をねぎらった。

山木さんは「部落を出る時、友達の印に族長がくれたもの」と、祭りで使用する頭飾りや弓を見せてくれた。アララの羽は鮮やかな色を保ち、弓にも当時の張りが健在だ。

タピラペ族の部落へ潜入

シッキリン族と暮らして4カ月、「怖がりもせず、インディオと一緒に生活する男がいる」との噂が修道士内に広まった。パラ州とトカンチン州との州境にあるマツ・グロッソ州サンタ・テレジーニャ市のフランシスコ・ジェンテル神父から、タピラペ族の部落に同行してほしいとの依頼があった。

依頼を引き受け、カロン神父に4カ月分の報酬を求めると、「神が報いてくれます」との返事。「一銭ももらえないのか」と愕然とするも夢は金銭に換えがたい。無給を覚悟でタピラペ部落へと向かった。

「文明人が入り込んで風邪や肺病がはやり、カヤポ族の襲撃もあって大勢が死んだと聞いた。俺が行った時は、人口72人しかいなかった」。

元々アラグアイア川の支流タピラペ川の上流に集落を形成していたが、

1950年代から始まった人口減を機に教会関係者らが説得、部族の半数がSPIの活動拠点があった下流に移動していた。

タピラペ族も東洋人と良く似た風貌で、子供の頃は蒙古班があった。裸の手足には綿を寄って作った糸をびっしりと巻き、男女とも木の実で作った耳飾りをつけていた。男性は下唇に穴を開け木の棒をはめ込んでいたので、いつも涎がたれていた。独自の言葉があったが、片言のポ語も話した。

興味深い儀式の数々

「特に興味深かったのは儀式だった」と、男女の成人式の様子を説明した。「女の子は初潮が来ると、暗い部屋に1カ月隔離されて、食べ物を持ってくる親以外とは誰とも会うことが禁止されていた」。男の子は狩りが上達しある程度の年齢に達すると儀式を行なう。「カシヨツハという魚の針みたいに鋭い牙で、太ももの付け根から足下まで血が流れるまで裂いたり、大木を持ち上げたり、色々な項目で勇敢さや力が試された」。

男女共に儀式を終えると改名し、12～13歳で許婚と結婚し子供を産んだ。出産年齢が低く子沢山のため、人口の回復も早かったという。葬式も重要な儀式の一つだ。

「仕切りのない広い土間だけの家の床に穴を掘ってハンモックに遺体を寝かせ、丸太を敷き詰めてバナナの葉をかぶせた上に土を盛った。死んだ人がかわいがっていた犬も『一緒に行くから』と殺して、持ち物と一緒に埋葬していた」。

葬式には部落の住民全員が参加、夕方から夜が明けるまで墓の上を飛び跳ねながら死者の人生や人柄について歌い続けた。「明け方には墓が踏み固められてツルツルになり、時間が経っても臭いがしなかった」という。部族の伝統には様々な知恵が隠れていた。

乾季でも土中で持ちこたえるマンジョカなどイモ類と、バナナを家族ごとに植えた。冬のないアマゾンではどちらも年中収穫できたため、蓄えるという習慣はなかった。焼畑農法で畑を作り、雑草が生えだすと場

所を転々とするやり方に、フランシスコ神父が「もっといい畑を作り、同じ場所で連作する方法を教えてほしい」と依頼。部落の畑を一カ所に集め、全員に食料が行き渡るように指導をするのが4年間滞在したタピラペ部落での主な役割だった。



シッキリン族に貰った頭飾りと弓矢



シッキリン族の様子(山木氏所蔵)

今も語り継がれる武勇伝

一番の思い出の一つは、タピラペ族の仲間の救出劇だ。神父たちの働きかけで部族が二手に分かれたせいで、下流に残った仲間が『向こう（上流）に自分の親戚が残っている。きっと苦労しているはず』と言い始めた。それで皆で会いに行こうということになった。

しかし遠征には危険がつきもの。他部族の攻撃に遭えば捕虜になる。「初めは大勢志願したけど、最後に残ったのは俺と5人のタピラペ族だった」。鉄砲と弓で武装し、カヌーで上流へと向かった。

襲撃を免れ無事に到着した昔の部落には、僅か3人の生存者が残るだけだった。生き残った仲間は「昔は少なくとも100人はいたが、部族が半分に分かれた後、他の部族に何度も襲われ子供も全て連れて行かれた」と悲劇を明らかにし、救いの手を喜んだ。

当時、文書に記録する文化がなかったタピラペ族には語り部があり、部落内で起きた出来事を記憶し後世に伝承した。「彼らは部落の中で起きたことを何十年経っても決して忘れない。悪いことをすれば絶対部落に入れてもらえない。だから今でも、一度も顔を会わせたことのない幼い子供までも俺のことを知っていて、『ヤマキ、ヤマキ』と言って寄って来るよ」と嬉しそうだ。

妻が育てたインディオの子

25歳の時に結婚し、部落で新婚生活を送った妻のルイザさんと二人で部落を訪れると、喜んで駆け寄って来るもう一人の人物がいる。カラジャ族と結婚したタピラペ族の女性タイパの子、イパレという名の男性だ。



部族と一緒に生活した頃の若き山木夫妻 山木氏所蔵

山木夫妻の長男が誕生した同時期に生まれたが、母親の母乳が出ず、ルイザさんが2人の赤ん坊を両腕に抱えて母乳を与えた。

「タイパは子供に『ルイザの乳がなければお前は死んでいた。お前の母はルイザだ』と教えて育てた。イパレは今もルイザを母として慕っている。

人にしてもらったことをすごく大事にする、義理堅い民族なんです」と、彼らへの深い親愛を込めて語った。

長男が就学年齢を迎えたため、山木夫妻は聖市に移り住んだ。仕事や子育てに明け暮れ何十年も部落を訪れることができなかったが、退職後は年に1、2回部落を訪ね、懐かしい仲間との友情を今も温め続けている。

タピラペ族に再び農業を＝69歳、初心に戻り夢を追う

「もう狩りも農業も、殆どしなくなってしまった」。山木源吉さん（69、山形）は家族のように生活を共にしたタピラペ族の現状を嘆いた。出聖して以来仕事や子育てに追われ、何十年も部落を訪れることが出来なかった。伝統は崩れ彼らの生活は様変わりし、生活にも困窮し始めた現状を憂う。

他部族の襲撃や文明人との接触で人口が激減し、居住地を移動してきたタピラペ族は96年、インディオ保護局「FUNAI」（Fundação Nacional do Índio、1967年設立）が元々の居住地であったマツグロソ州コンフレーザ市ウルブ・ブランコをインディオ保護区と設定したことで、同地区に移り住んだ。

一度は農業者の手に渡り開発された広大な牧草地帯だったため、侵入者を防ぐため七つに分かれて入植した。山木さんによれば現在合計約750人、最大規模の集落には300人が暮らしている。

農業が衰退した原因の一つは、「畑のある原始林までは最低でも2～6キロは歩かないといけない。作物を植えても監視が出来ず、豚が食べてしまう」ことだ。



農業支援の企画書を練る山木さん

土地を追われた補償として、政府による福利が厚く、医療費は無料、生活、出産、育児には補助金、55歳になると無職だった人でも年金が支給される。そのため、生計は立つが、森林生活の知恵はなくなった。

同保護区内で鉱山開発やダム建設を行う企業があれば、開発の代償にテレビ、携帯電話、パソコンや冷蔵庫など、数々の文明の利器が手に入ったことも、部族の生活を変えた一因だ。

「もう今は、政府や企業の補助に頼りきって生活するおんぶに抱っこ
の状態。それなのに昔の考え方のまま、蓄えるということをしてない。
だから人口増加につれ食糧不足が進行している」と年々状況は悪化し
ている。

大学を卒業しても就職口はなく、部落内の求人は飽和状態。

「ブラジル人には、インディオを『けだもの』と差別する意識がある。
ONGや政府の機関ですら、芯から受け入れ対等に付き合っている
とは思えない。保護してあげている、という上から目線が感じられる」
と憤りを見せる。山木さんのように、自宅を行き来して同じ釜の飯を
食うような関係を築いた人間は少ない。

考え抜いた末、「まずは農業に力を入れ、自給自足の生活を取り戻す
べき」との結論に至った。「まずは指導がしやすい家族単位の小さい
部落に住んで、農業を根付かせたい。一つの部落が豊かになれば、他
の村もやりたがるはず」と確信を持つ。

再び部落に住んで農業支援をするべく、構想してきた企画はほぼ出
来上がった。政府の許可が得られれば、スポンサーや協力者を募る予
定だ。「これは金もうけじゃないし、5年以上はかかる。妻は家に残
ると言っているが、『これはあんたと結婚する前からの夢だから、俺
は一人でも行くよ』と言ってある」と決意は固い。



飛行場へ向かうシッキン族（山木源吉氏所蔵）



森^{じゅんすけ} 淳介ご夫妻と再会しました

聖州サン・ミゲル・アルカンジョ市 志方進

2年半ほど前にお会いした森淳介ご夫妻とまたお会いしました。
下は今回写した写真です。

淳介氏は1922年2月25日生まれなので100歳になられ、夫人の美代子さんは1929年3月21日生まれで93歳です。お二人ともお元気なので何よりです。結婚して(1950年12月)からは71年余になるとのこと。



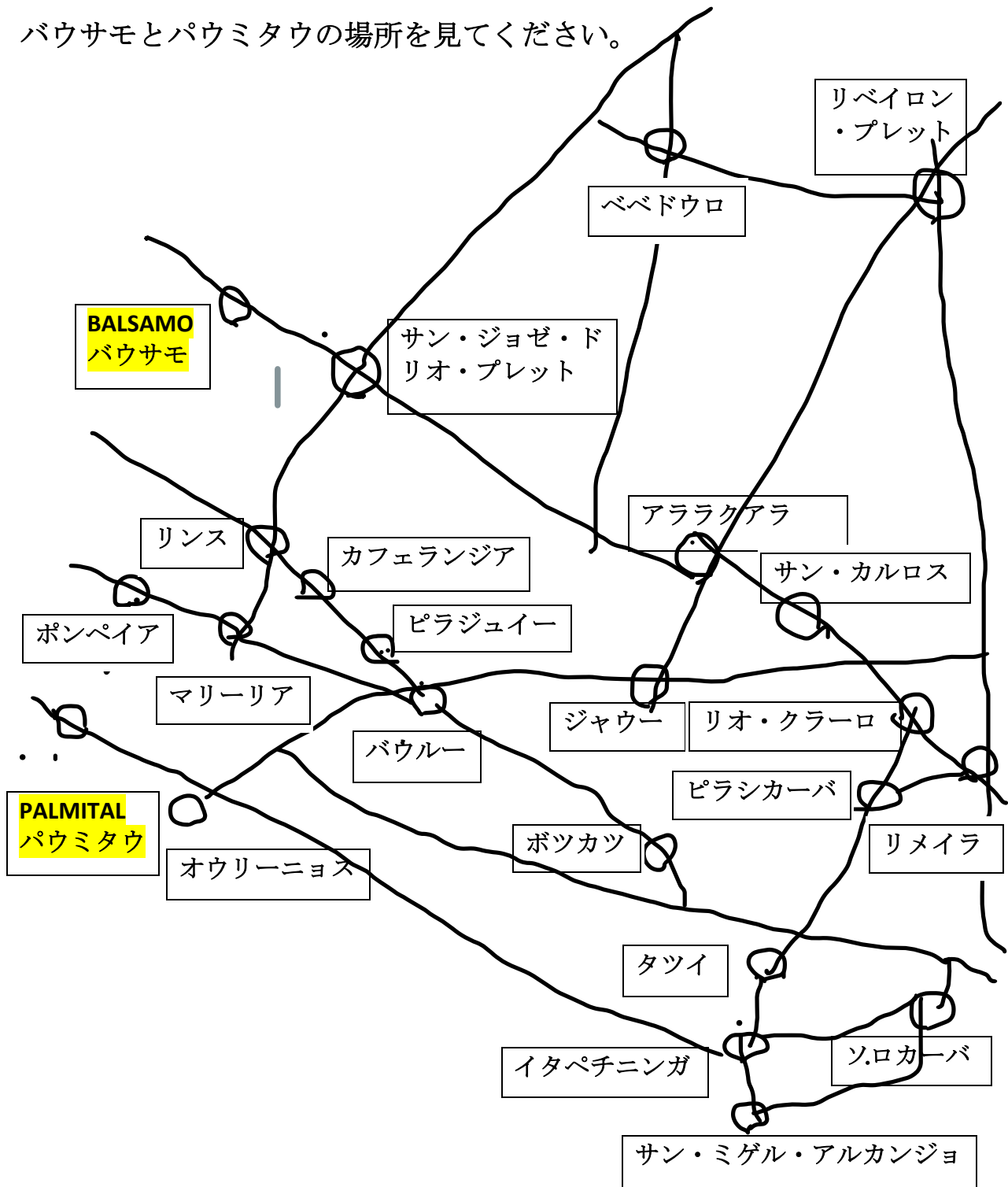
1941年に太平洋戦争が始まった時、淳介氏は19歳、美代子さんは13歳で学校は午前中にブラジル学校へ行き、午後は禁止されていた日本語を隠れて学ばれたとのこと。

当時、淳介さんは聖州サン・ジョゼ・ド・リオ・プレット市近くのパウサモ(Balsamo)に、美代子さんは聖州オウリーニョス市から北西へ約30kmのパウミタウ(Palmital)に住んでおられたそうです。

終戦後、反物店の主人が「日本は負けた」と言ったら、勝ち組のお客さんが来なくなったとの事。スーパーマーケットでも同じことが起こったそうです。楽しみは野球で、大会はパラナ州アサイ市でありました。

サンパウロ州西部の略図です。

バウサモとパウミタウの場所を見てください。



次ページからは前回（2019年12月10日付け第200号）の記事です。

てんちようせつ きげんせつ しんどうれんめい
天長節・紀元節、臣道連盟

聖州サン・ミゲル・アルカンジョ市 8期 志方進
(2019年12月10日発行第200号より再掲載)

私が住んでいる街で、当地の旧コチア産業組合を買い取って、農産資材店とスーパーマーケットを運営しているグループの専務である森エリオさんのご両親がパラナ州クリチーバ市から、森さん一家を訪ねて来られましたので、お話をお聞きしたのです。70年ぐらい聞いたことも使ったこともない「天長節・紀元節」の用語で、話がおもしろくて、今日（11月2日）までに3回お訪ねした次第です。

天長節（1948年に「天皇誕生日」と改称されるまでは、こう呼ばれていた祝日）には、学校で運動会があって楽しかったそうです。紀元節（1873年、神武天皇即位の日を祝日としたもので2月11日。1948年に廃止されたが、1966年に「建国記念日」として復活した）などには、野球をしたり、陸上競技をしたりしたそうです。

また、巡回してくる映画（当時は無声映画で弁士つき）も楽しかったとのこと。以上は全て学校での行事でした。

森さんの父上^{じゅんすけ}淳介氏は97歳、母上美代子さんは90歳です。（写真）



淳介氏は1932年、10歳のとき両親と共に兄弟5人で渡伯、聖州カフェランジアのパッカ植民地に入植され3年間過ごされました。パッカではパトロンの植村さんの息子の勇さんがポ語を2年間毎晩教えてくれたそうです。当時この辺一帯はコーヒー園でしたが、今はサトウキビ畑です。

それからパラナ州アサイの笹子^{ささご}さん（勝ち組）の所に移られたそうです。

戦時中は伯国政府により、日本語は教育も会話も禁止されていたので、隠れて勉強したそうです。3人程で立ち話をしていると、警察官が来て問いただすので、野球の相談をしているので、何も怪しいことはしていないと説明したそうです。

淳介氏は4年生までの日本語をパッカ植民地で、美代子さんは5年生までの日本語をチバジ植民地で、夫々の日本語学校（日語とポ語を教えていた）で学ばれました。

淳介氏の父上の俊雄さんは、アサイ市で臣道連盟（支部長は谷田才次郎氏）に入っておられ、天皇皇后両陛下の御真影（公式肖像写真）を礼拝されておりました。

それで、州都クリチーバの軍警のDOPS(ドップス、Departamento de Ordem Política e Social 政治社会治安部)に呼ばれ、同市の足立氏（勝ち組）のご自宅にお世話になりながら、毎日午前9時にドップスへ顔出しさせられていたとのこと。

臣道連盟の主だった人々40名程はアンシエッタ島に流されていたので、俊雄さんは家族の方々から頼まれた品々を島へ届けていたとのこと。

なお、俊雄さんは、美代子氏の父上浦次郎さんが終戦後日本を訪問したので負け組にされてしまい、勝ち組を除名されたとのこと。

淳介氏は1942年20歳の時には、アサイの病院で医師 Dr. Edgar Bardal 氏の通訳をしていたので医師の助けがあり、警察に呼ばれることは無かったそうです。

そして、淳介氏は1950年12月に28歳のときアサイで結婚。その時には、負け組の娘と結婚してはだめだと言われ、結婚式をした教会には、勝ち組の人々が見張っていたので教会内へは親族・友人の誰も入れ

ず、式後逃げるようにして教会を後にしたそうです。なお、美代子氏は結婚した時は21歳でした。

美代子氏はチバジ生まれ。ブラジル人はチバジと言っていたが、本当の名前はタワジだそうです。父上は前記の浦次郎さん、母上は千代野さんです

アサイにいた時には、年に2~3回はアサイで入手出来ないものを買いにロンドリーナへ行っていたそうです。

そして、1960年にはクリチーバへ移転されました。

下図はカフェランジアを含めたサンパウロ州南西地方の鉄道線略図です。



【編集委員メールアドレス、ご連絡用電話番号】

そ が よしなり
曾我義成 ysoga@rimobloco.com.br 事務所(Escritório) 11-4057-2377
携帯(Tel. Celular) 11-97120-0863

ほんこはらくにひこ
盆子原国彦 kbonkohara@live.jp

おさだたかとし
長田譽歳 takatoshi.osada@gmail.com 自宅(Residência) 11-5563-6929

こやまのぼる
小山徳 tokukoyamano@gmail.com

しかたすすむ
志方進 ssshikata@gmail.com 自宅(Residência) 15-3279-1521

皆様ふるってご投稿ください。ご投稿を受信しましたら、着信通知を発信しておりますが、ご投稿の到着を確認してください。ご意見、ご提案、お叱りなどもお寄せください。

【名簿訂正】住所や電話番号などを変更された場合は会長または編集委員へお知らせくださるようお願いいたします。

【お願い、お知らせ】次号は8月上旬に発行予定です。
ご投稿は7月20日(水)までにお問い合わせ致します。

【編集後記】

今号へも多くのご投稿をありがとうございました。
相変わらずのコロナ禍ですが、皆様どうぞ元気でお過ごしください。

